【書き下し及び注】

浄土十勝箋節論巻中　　乾上

菩薩大乗戒比丘澄円撰

無解大乗勝 第四十

夫れ以れば、漢光数千の士卒、呼沱の波瀾をりしや。一念澄浄なる所以なり。李将行孝の箭鏃、野中の黄石を貫きしや。誓心堅固なる所以なり。吾が門の所謂「法既本妙麤由物情但開其情復本」之れと相同じ。然れば即ち麤食者の『法華』を解すれば、醍醐変じて雑血と為り、円行人の権教を会すれば、麤法反って妙法と為る。天台智者の曰く、(1)「三業の中に意業を主と為す」と。居(あき)らかに此の語誠なるかな。学者心を留めよ。諸爰に吾が宗持名の行人は然らず。其の解了を謂わば、無相真如第一義空、曽て未だ心に措かず、其の造罪を謂わば、四重、八重、五逆、十悪、更に一毫をも制せず。然りと雖も弥陀尊号の霊徳に持せられて、大乗行人の佳名を得たり。焉んぞ私議すべけんや。居(あき)らかに例せば、かの四洲臣属し、諸神翼従すれば嬰孩無識と雖も、金輪聖王の尊号を

(1) 智顗『菩薩戒義疏』（正蔵四〇・五六三上）。

得るが如く。また、三密修行し諸尊冥護すれば、未だ顕加の位に及ばざれども、秘教修行の大人と名づくるに似たり。然れば即ち、持名の行人を以て大乗の修者と名づくることは、是れ行者の解了に関して以て之れを論ずるに非ず。正しく法体の徳用に約して、以て語ることを為すのみ。何言うぞや、夫れ持名行者の相貌を案ずるに、縁事縁理の誓心莫かれば、大乗の行人とも名づけがたく、沈空滞寂の独情を闕けぬれば、小衍の修者とも号し難し。正しく是れ、ただ作悪のみ知りて微善をも修せざる類のみ。此等の人を以て究竟大乗の行者と称することは、明眼の智人在りて彼の所修の妙行を見て、これを褒歎する語ならんと謂うことなかれ。行人の解了に約して、以て其の義を論ずとは、夫の黄離は青陽の節を知り、螻蛄は朱夏の時を識り、石燕は降雨の日を知り、林烏に反哺の孝あり、野人の孝行を致し、子女が恩孝を勤め、蛇は王気に向かいて蟠まり、鵲は太歳を背いて巣口を開き、燕は戊巳の日を除いて泥巣を銜む等と言うが如きに至りては、豈に是れ其の物情を言うならんや。只だ是れ知者の之を言うのみ。

問て曰く、持名の行人を以て正しく大乗の上類と名づけ、修者の解了に約せずして大乗の佳名を与うこと、正く出て何れの経釈の現文に在るや。

答えて曰く、且く『大乗荘厳経』に云く、(2)

若し善男子善女人有りて、無量寿仏の名号を聞くことを得て、一念の信心を発して帰依瞻礼すれば、当に知るべし。此の人是れ小乗に非ず。我法の中に於いて第一の弟子と名づくることを得已上と。

又た、始祖玄閑大士『論註』に云く、(3)

問て曰く、上に生は無生なりと知りぬと言うは、当に是れ上品生の者なるべし。若し下下品の人十念に乗じて往生する。豈に実の生を取るにあらずや。但し実の生を取らば、即ち二執に堕せん。一には恐くは往生することを得ず。二には恐くは更に生惑を生ぜん。答う、譬えば浄摩尼珠を之れを濁水に置けば、水即ち清浄なるが如し。若し人無量生死の罪濁に有りと雖も、彼の阿弥陀如来の至極無生の清浄宝珠の名号を聞

(2) 法賢訳『大乗無量寿荘厳経』（正蔵一二・三二六上）。

(3) 曇鸞『往生論註』（正蔵四〇・八三九上）。

きて之れを濁心に投ずるに、念念して中に罪滅し、心浄くして即ち往生することを得。又た是れ摩尼珠を玄黄の幣を以て、裹(つつ)んで之れを水に投ずるに、水即ち玄黄にして、一ら物の色の如し。彼の清浄仏土に阿弥陀如来の無上の宝珠有り。無量荘厳功徳成就の帛を以て、裹(つつ)んで之れを往生する所の者の心水に投ずるに、豈に生の見を転じて無生の智と為すこと能わざらんや已上。

又た、『決定往生集』に云く、(4)

世俗の凡夫、纔かに信心を起して、大乗経の無所得の教を受けて、無所得の浄土の仏を念じて、称名し作礼すれば、皆な無得を成ず。法力に由るが故に自然に成就するなり。至乃此れ等の文に準ずるに、世俗の行人、設い自ら中道法門の文義の相を知らずとも、但だ能く仏徳を念ずれば、自然に無得を成ず。梵天王の自ら甘露を作りて其の味を知らざるが如し。西方の行者も亦た爾なり。自ら無所得と作りて而も自ら是れ無所得なることを知らず已上と。

(4) 珍海『決定往生集』（浄全一五・四九〇上）。

夫れ両賢経に依りて逞しく之れを得たり。今重詳せず。故らに示さん。自作甘露、不知其味の文、学者、指を染めて焉を試みよ。

又た、竜猛大士の『菩提心離相論』に云く、(5)

菩提心とは、一切の性を離る。問て曰く、此の中に云何んが一切性を離る。答う、謂く蘊処界、諸の取捨を離れて法無我平等を自心本来不生自性空なるが故に已上と。

此れは縁理無相の菩提心を明かすなり。西郊の弁公上人、上の文を判じて云く、(6)

此れは大乗に約して菩提心の体を説く。法無我の理と相応する心、此れを指して菩提心と云う。問て曰く、此の心最も甚深なりとす。我れ等未だ法無我等の道理を知らず、何ぞ菩提心を発さんや。答て曰く、此の心、甚深に非ず、謂く行者善縁に遇いて卒爾に仏境を縁じて、毛竪(みのけよだ)ちて涕を流し、希求の心を発す。此の心の自性を推撿するに、法無我の理を以て所依とすと言う。更に自ら法無我等の理を知ると謂うには非ず已上。

(5) 龍樹『菩提心離相論』(正蔵三二・五四一中)。

(6) 明恵『摧邪輪』(浄全八、六八〇上)。

聖道猶お爾り。矧や浄土に於いてをや。問て曰く、孰か知らん。荘厳の文は無想解了の上の帰依瞻礼を説かんとは如何ん。答て曰く、只だ「得聞名号、非是小乗」と宣べて、未だ無相甚深の妙解有りとも曰わず。仁者、奚ぞ自ら封拙を生じて、以て迷惑えるや。『摂大乗論』に曰く、(7)「了義大乗依文判義」已上。之れを以て之れを観れば、経に所謂る「発一念心、帰依瞻礼」の言は、只だ散心無観の称名を顕すのみ。行者等、早く漆桶の慮を抛て、速かに鳳膠の志をきつべし。若し爾らば、是れ千即千生か。是れ万不一失か。

難じて曰く、「法妙麤情、開情復本」と云うが如きは、是れ則ち機解の不同に由りて、法門の浅深を判ずるの意なり。然るに今、持名行者の心念の相を案ずるに、只だ是れ猒苦欣浄の自利心にして全く無相深玄の妙解も無く、又た有為行願の宏誓をも闕けり。若し縁事縁理の菩提心を具足せずんば、争か大乗至極の行人と名づく可けんや。

答て云く、万法に皆な、横具竪具の二途有り。所謂る或いは法在一心、説必次第と云い、或いは総在一念、別分色心と云い、或

(7) 出典未詳。良忠『往生要集義記』（浄全一五・三四九下）等に同文あり。

いは印文読誦、同異各別と言うが如きは是れなり。衆生の発心も亦復た是の如し。若し行者有りて、或いは一実菩提の解了を発し、或いは四弘甚深の誓願を起す等は是れ竪発の菩提心なり。又た只だ一念信解の上に二種の菩提心を周備する、是れ横具の菩提心なり。此の義諸教の通談なれば、毛挙するに遑あらず。且く弁公上人の『荘厳記』に云く、(8)

至相大師の『発菩提心章』に云うが如く、体性とは、義の不同に随う。略して三種有り。一つには相発、二つには息相発、三つには真発なり。相発と言うは、深く生死の過、涅槃の福利を見て、生死を棄捨し、涅槃に趣向して、相に随いて猷求するを相発心と名づく。息相発と言うは、深く平等を悟り、其の生死本性、寂滅涅槃も亦た然なりと知りて、前の相を背けて、正如の道に帰するが故に名づけて発とす。真発とは、真性由来(もとより)已体なり。彼の異求を捨てて、実相現前するが故に発心と名づく乃至(9)問う、此の心甚深なりとす。凡夫何ぞ之れを発さんや。答う、我法二執は、恒時に起ると雖も、教に遇

(8) 明恵『摧邪輪荘厳記』(浄全八・七七七上)。
(9) 明恵『摧邪輪荘厳記』(浄全八・七七七下)。

わずんば、未だ名義を知らず。道心も亦た是の如し。愚昧の人、名義を知らずと雖も、此の心、起り難きに非ず。謂く、善友に親近し、正法を聴聞すれば、即ち正見を起す。正見と相応する心は、即ち自ら二空に順ずるなり。若し違法は即ち二体有り、順法は即ち二体に無し。離相論に云うが如く、諸仏世尊、咸く是の説を作す。悲心所生の無量の福聚は、彼即ち最上真実の空理なり。諸仏威神の出生する所の自利利他の二行成就す云云と。此れ即ち真俗二行相順し、事利二体、違せざればなり乃至説広。(10)

此の釈の意の云く、行者等相息真発等の三種の菩提心に於て一一別発せずと雖も、只だ正法を聴聞して即ち正見を起す。一念の上に於て具に発菩提心の徳を賅(そな)えたりと。

是れ即ち横の発心の意なり。之れを以て之れを観れば、欣求西方の行者等、設い縁理縁事等の菩提心を発さずと雖も、正しく報身如来を頼って界外の報土を欣求する心だに有らば、専ら横に大乗至極の心を発起する人と名くべき。道理掲焉なる者なり。海公

(10) 明恵『摧邪輪荘厳記』(浄全八・七七九上)。

詳勘して「梵王甘露を作して其の味を知らず」と言える。盍し此の謂いなり。既に横具の三心五念有り。奚れを横具の発大乗心母たらんや。有智高識の学者、知ぬべし。

問て曰く、若し持名の修者を以て直に大乗の行人なりと名づけば、専ら穢国に住して群萌を利済すべし。然るに、ぞ急かに東隅を捨てて、西方に走り、迷徒を背いて自証を求むるや。

答て曰く、菩薩に二種有り。一には曰く智増、二には曰く悲増なり。智増の人は自証を先とし、非増の類は利他を本とす。二人各別にして先後不定なり。此の義『智度論』(11)に見るに、知らんと欲せば之(もち)いて看よ。

問て曰く、持名の行者等、設い縁理縁事の二種の発心無しと雖も、専ら大乗の行人と名づくべきこと文理炳焉(へいえん)なれば、所立成じ竟ぬ。若し爾らば、西方の行人は要ず当に他を先とし、自と後にすべし。然る所以は、且く『涅槃経』の迦葉菩薩礼仏の偈に曰く、(12)

発心と畢竟と二つを別たず。是の如きの二心、先の心難し。
自ら未だ得度せざる。先ず他を度す。是の故に我れ初発心を

(11) 出典未詳。澄円『夢中松風論』にも「但し菩薩に智増・悲増の二類あり」(続浄九・一六六頁上)として『大智度論』を引く。

(12) 曇無讖訳『涅槃経』(正蔵一二・五九〇上)。

礼す。初発心は人天の師なれば、声聞及び縁覚に勝出す。是の如の発心、三界に過ぎたり。是の故に最無上と名づくることを得と已上。

然るに今、安養の行者を見聞するに、穢土を厭いて浄土を欣い、衆生を捨てて自楽を求む。豈に大乗の行者と名づくべけんや。

答て曰く、斯の問答、天台尊者の『十疑論』、玄忠禅師の『安楽集』、千福大徳の『群疑論』等の諸書に出でたり。文広きが故に於是に載せず。後進自ら看よ。

請い問う。之れ曰く、且く『十住毘婆沙論』に云く、(13)

問て曰く、何が故ぞ我れ当に衆生を度すべしと言わずして、自れ得已って当に衆生を度すべしと言うや。

答う。曰く、自ら未だ得度せざれば、彼を度すること能わず。人の自ら泥に没するが如きは何ぞ能く余人を救抜せん。又た水の為に漂わさるが如く、溺を済うこと能わず。是の故に我れ度ぢ已って当に彼を度すべしと已上。

『法華疏記』第一に云く、(14)

(13)『十住毘婆沙論』（正蔵二六・二三中）。
(14)『法華文句記』（正蔵三四・一五一上）。

自行、妙宗に暗ければ、何ぞ目無くして導くに殊ならん。彼れ此れ倶に迷い、自他咸く没すと已上。

又『毘盧遮那経疏』第十に云く、[15]

又た普く一切衆生を度するを名けて極度とす。若し人自ら未だ度を得ずして人を度すことを得といわば、則ち爾るべからず。若し自度して又た能く人を度せば、斯れ是の処有り已上。

又た同第十四に云く、[16]

若し実くの自ら了知せずんば、設い他に種種に開導すとも、終に得る理無し。若し人、自ら是の如きの内証の法を開発せずして、人の為に説いて他をして悟らしめんと欲せば亦復た是の処有ること無し。何を以ての故に無足の人有りて衆人を呼召して、是の如きの言を作さく、我れ当に汝を為けて妙高山の上に登るべしというか。当に知るべし。此の人は必ず智者の為に軽笑せらるるなり。何を以ての故に。若し自ら無足の者は、尚、自ら是の如きの妙高山王の少分の高処にも登ること能わず。況えば能く一切を為けて、彼の頂に登らんや。

(15) 一行『毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・六八一下）。

(16) 一行『毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・七二八中～下）。

又た、人有りて未だ大海の波浪を渡ること能わずして、而も他に謂いて我れ当に汝を渡して彼の岸に達せしめんと言わんが如し。当に知るべし。亦た是れ理を得ること有ること無し。行人も亦た是の如し。若し自ら未だ無師の慧を覚らずして他をして聞法得悟せしめんと欲せば、必ず此の理無し已上。

是れ乃ち円密二宗の大乗行者の自を先とし、他を後にするの明拠なり。抑、先自後他の教誡は、啻だ円密内法の所談に局るのみに匪ず。外談も亦た然なり。且く『南華の真経』に云く、(17)「古の至人は先ず諸の己に存して後に諸人に存ず」已上と。

『疏』に云く、(18)

諸は於なり。存は立なり。古昔の至徳の人は懐を虚しくして、世間に遊び、必ず先ず己が道を安立して、然して後に他人をす。未だ己身に存せずして能く物を接する者有らず。古人を援引して以て竪誡と為と已上。

問て曰く、胡ぞ先自後他と先他後自との不同有りや。

答て曰く、此れに二義有り。一には曰く、智増悲増の異、二に

(17)『南華真経』「人間世」。
(18)『南華真経注疏』四。

は曰く、浅位深位の殊のみ。若し之れを以て之れを言わば、欣求浄土の行者は是れ智増の菩薩か。亦た浅位の索多か。涅槃所説の菩薩は或いは悲増か。亦は深位か初住。悲智浅深其の人殊りと雖ども、倶に是れ大乗の行者のみ。

問て曰く、悲智の二聖、何れを以て勝と為るや。

答て曰く、浅位悲増の菩薩には二人倶没の失有り。下位智増の菩薩は並ぶるに難を出ずることを得るの得有り。若し爾らば悲増の菩薩は一鞭殿(ひとむちおく)れたるか。又一義有り、光に云く[19]「若し自利せざらんば、何ぞ能く利他せん。経に菩薩と言うは、利他の為すとは意楽に拠りて説く」已上。若し之れに依りて之れを観れば、一切の菩薩等、若し発願の時は、必ず他を先にし、自を後にす。若し起行の日は、定めて自を先にし、他を後にする者か。若し此の義に背して、初心始行の菩薩等、強て自ら未だ度を得ずして、先ず他を度せば、教に違し、理に乖かんか。智人思択せよ。

夫れ問て曰く、機解に関からず、境界に任せて勝徳を勘判すること何れの処に出たるや。

(19) 普光『倶舎論記』（正蔵四一・二下）。

答て曰く、而来(なんじ)たれ、吾れ語らん。夫れ世親論主は定業の相貌を定め、荊渓尊者は円経の徳用を判ずる等、是れ其の誠証なり。又た弘法大師の『真言問答』に曰く、[20]

問う余乗に依らず、頓悟門に依りて、三密の行を満じて、此の生に道を成ずる。先ず頓悟を証し、次次に余義を成ぜん。他宗の説く頓悟と真言門の頓悟と、同とや為ん、異とや為ん。答う、頓悟の義同じと雖ども、其の意少異あり。問う異の意、如何。答う、余教の頓悟は根熟し、時を待りて頓に大乗に入る。密乗の頓悟は初心の凡夫、此の生証悟するなり。所以に異と云うなり。問う、初発心の人、此の生に証すとは、華厳宗の初発心、時便成正覚の如きか。答う、彼と亦た不同なり。問う、爾らば如何。答う、彼は即ち或いは利根の者、円の一分の理を覚悟する義辺にして、究竟の覚に非ず。此の真言教は凡より仏位に入ることを得るのみ。問う、頓悟の異は爾るべし。何んが故ぞ顕教は機熟れば悟ることを得。真言門の中には、初心に入ることを獲るや。答う、教力に浅深あるが故

(20) 空海『真言問答書』（散逸）。

に爾なり。問う、何なるが教力の深、何なるが教力の浅ぞ。答う、顕は浅く密は深し。問う、此の義爾る可からず。所以は何ん。根熟の人は有智の故に即ち能証の智深きに随て、所証の理、是れ応に深なるべし。初心の識浅く、即ち浅識の故に所入浅なる可し。所以に顕教は深なる可し。根熟して証るが故に、真言は浅なる可し。初心にして入るが故に。答う、是れ爾らず。問う、然らば如何。答う、浅略門は教力劣なるが故に。頓に初心の凡夫を引くこと能わず。深秘門は法力勝れたるが故に。此の生に仏位に起昇することを得せしむ已上。

此の所判は所修の行境に従て、教法の深浅を詳にす。学者見つ可し。抑(そもそも)、静に諸方学者の難勢の趣を案ずるに、多く念仏の行者は縁事縁理の誓心亡きが故に、大乗の行者とは名け叵し。若し大乗の持者に非ずんば、焉ぞ小行修者の劣名を遁(のが)れんやと言えり。小子彼に対して曰く、持名の行人は正く沈空滞寂の小心無きが故に。小行の行者とは号く可からず。若し小乗の行者に非ずんば、闔んぞ大乗の佳名を与えんや云云。夫れ持名の行者を以て、大乗の

行人と名くることは、猶お是れ附傍寄在の教相にして、全く元意独一の勘判には非ず。例せば念仏を以て陀羅尼蔵に同じ『観経』を以て方等部に属するが如し。何の言いぞや。所謂、偏小権大、顕実密実、教外別伝の上の一層級に居して絶待独一、究竟大乗の義を清談すべし。

問て曰く、其の義、何如。

答て曰く、夫れ其の機根を謂えば、是れ一向行悪、行不修微善法の悪輩なり。其の所修を謂えば、乃ち難可思議無上功徳の尊号なり。是れ則ち難思の機法なるが故に。四記せば之れを記せず。三量も之れを量せず。既に三量四記の及ぶこと能わざる所なるが故に。亦た大小勘判のぶこと能わざる所なり。若し爾らば持名の行者を以ては、只だ難思感応の妙機と名け、大小両乗の通号を絶去すべきのみ。但し、若し非大非小の機法の上に於て、且く強いて其の称号を与えば、過未不談の最勝上上の大根機と名づくべきなり。是れは斯れ、最上秘法の手を伸べて、以て最下魯鈍の人を提ぐるの義、篇に約して以て語(い)うこと為す。学者、迷を致すこと

莫れ。若し剛明卓抜の高識を負て、酬酢決択の故質に達するに非る自りは、其れ孰か能く此れを信ぜんや。上根上智、大度量勇鋭の大丈夫、自量して知れ。原るに夫れ、聖道の諸宗は透徹を以て本と為るが故に、義解を根元として以て契証し別願の玄極は往生を以て先と為るが故に、平信を正因として、以て即詣す。無解の出離を教示するが故に、教法は諸宗の最頂に居り。実相の解了を奈(いか)んともせざるが故に。当機は鈍根の下輩に被しむや。誠に是れ最尊最上の大法、易行易修の要行なる者をや。夫れ吾宗二祖、綽公大師、経を引きて曰く、(21)

人寿百歳なるも、夜は其の半を消す。即ち是れ五十年を減却するなり。五十年の内に就て、十五已来は未だ善悪を知らず。八十已去は昏耄虚劣なり。故に老苦を受く。此れ自り外、唯だ十五年の在る有り。中に於て外には則ち王官逼迫して長征の遠防し、或いは繋がれて牢獄に在りき。内に則り門戸吉凶衆事の牽纏われて煢煢忙忙として常に求むるに足らず。斯の如く推計するに幾の時か有りて道業を修することを得可き。

(21) 道綽『安楽集』（浄全一・七〇六下）。

此の如く脱量する。豈に哀しまざらんや已上。

南無阿弥陀仏。

凡夫長寿勝 第四十一

夫れ生者必滅は是れ五道輪廻の定憂、会者定離は迺ち三界流転の常苦なり。所以に欲界の天人は五衰の朝の霜を悲しみ、北州の衆生は千年の夕の露に泣く。設い有頂の八万大劫と雖も只だ是れ荘周一夕の夢か。設い他化の一万六千と雖も亦た即ち蘆生半炊の眠か。啻(ただただ)濁悪世の衆生に匪ず。電光短祚の恨有るのみ。又た離垢世界は是れ上品の浄土と雖も其の国、人民、寿八小劫と宣べたり。孰れの人か之れを愁吟せざらんや。居何(いず)れの彙いか、之れを傷嗟せざらんや。

爰こに安養浄刹の衆生は寿命無量にして、更らに終尽の期無く、且つ体相金剛にして全く破敗の時無し。弥陀本誓に曰く、(22)

設し我れ仏を得たらんに国中の人天、寿命能く限量無からん。其の本願あて脩短自在ならんをば除く。若し爾らずんば

(22)『無量寿経』(浄全一・七)。

正覚を取らじ已上。

又た『経』に云く、(23)

無量寿仏の寿命、長久にして称計すべからず。乃至声聞、菩薩、天人の衆の寿命の長短も亦復た是の如し已上と。

又た室羅筏城逝多林中所説の『無量寿経』に云く、(24)

彼の仏の寿命及び其の人民、無量無辺阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づく已上と。

又た『称讃浄土経』に云く、(25)

又た舎利子、極楽世界浄仏土の中の仏を何の縁有りてか、無量寿と名づくるや。舎利子、彼の如来及び諸の有情、寿命無量無数大劫なるに由る。是の縁に由るが故に彼の土の如来を無量寿と名づけたてまつる已上。

宗家大師、之れを受けて曰く、(26)

果、涅槃を得て常に世に住す。寿命延長にして量るべきこと難し。千劫、万劫、恒沙劫、兆載永劫にして亦た無央なり。乃至十方の凡聖、心を専らにして向かい、身を分かち化を遣わ

(23)『無量寿経』(浄全一・一三～一四)。
(24)『阿弥陀経』(浄全一・五三)。
(25)『称讃浄土経』(浄全八一七上)。
(26)善導『法事讃』(浄全四・一八下)。

して往きて相い迎わしめ、一念に華に乗じて仏会に入る。身色寿命、尽く皆な平(ひと)しし已上。

又た二祖綽公大師『安楽集』に云く、(27)

若し阿弥陀の浄国に生ずれば、寿命長遠にして不可思議なり。是の故に『無量寿経』に云く、仏、舎利弗に告げたまわく、彼の仏を何が故ぞ阿弥陀と号するや。舎利弗と十方の人天、彼の国に往生する者は寿命長遠なること、億百千劫にして仏と同等なり。故に阿弥陀と号すと。各宜しく此の利の大なることを量りて皆な往生を願ずべし已上。

又た、慈恩大師『通讃』に云く、(28)

経に又た、舎利弗、彼の仏の寿命、及び其の人民、無量無辺阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づくと。讃じて曰く第二に、寿命の得名を答う。寿命とは第八識の上に連持の功能なり。即ち是れ不相応行の中の摂なり。無量とは、其の限り量り無く、無辺とは、彼の辺際無きを云う。阿僧祇劫とは、此れには、無央数劫と云う。問う、彼の尊、彼の衆、身、有為に属

(27) 道綽『安楽集』(浄全一・七〇七上)。

(28) 基『阿弥陀経通賛疏』(正蔵三七・三四二上)。

せば、未だ四相の遷移を逃れず、争か一期の磨滅を免れんや。答う、両重の生死を捨てて、五蘊常身を獲る。悲願無辺なれば身命何ぞ尽きん。況や又た殺業久く已み、寿命延遠なり。問う、弥陀は已に果位に居して寿命の無量なること然るべし。人民は見に因中に処す。何が故ぞ亦た彼の仏に同じからんや。答う、業累軽尠にして善種増強（ますます）し。既に分段の身に非ず。永く去来の質を離るること、仏と斉等（ひと）しくなること理に於て、違うこと無し。故に『無量寿経』に云く、彼の仏の寿命長遠にして称計すべからず。仮使、十方世界の無量衆生をして、皆、羅漢と成ぜしめ、共に尽く思惟すること百千万劫すとも、寿限を知らず、菩薩天人の寿命も亦た爾なり已上。

夫れ甚だ怖畏すべきは、是れ死苦なり。大いに求惜す可きは、亦た命財なり。設い但だ受諸楽の浄刹と雖も、若し一形寿命の定限有らば、遺恨幾許ぞや。譬えば、金杯の底無きが如く、又た摩尼の砕瑕に似ん者か。抑（そもそも）、啻（ただただ）生を貧し、死を悪むのみにあらず。亦た、修行仏道には、死魔を恐れと為し、生死の間隔は退大の根

本なり。然るに、安養浄刹の衆生は寿一劫百劫千万億劫ならんと欲せば、自在に意に随いて、皆な之れを得べし。無為自然にして、泥恒の道に次げり。凡そ寿命長遠の巨益は安楽第一の霊徳なり。焉ぞ思議すべけんや。夫れ桜梅桃李の風に散ずる春の夕には、世上の虚華を歓じて、南謨の妙行を修し、黄菊紫蘭の霜に萎れる。秋の朝には生死の苦果を想いて、西方の常楽を欣う。抑(そもそも)、如来の尊号は愛海の波瀾を超ゆる堅牢の舩筏、法蔵の誓願は安養の浄刹に詣る。金輪の宝輅なり。南無阿弥陀仏。

尼衆往生勝 第四十二

夫れ日月の光用を蓋覆する者は、是れ雲煙、塵霞、阿修羅なりや。諸仏の報土に詣でざる者は、乃ち五障、三従、穢質の女人なり。然るに弥陀覚王の大願業力に執持せらるる者は、忝くも五障の女身を以て直ちに九品の報土に至る。此の義、五千四十八巻に之れ明さざる所なり。此の旨、三国伝灯祖師の談ぜざる所なり。只だ是れ弥陀三部の秀句、夫れ光明一家の高判なり。仰ぐべし、崇(たつと)ぶ

べし。

但し論文に女人を簡するに似ると雖も、支那四百州の群英、皆な悉く之れを通曽せり。学者見つべし。

問て曰く、沙竭竜女、愛道、耶輸、是れ女質なりと雖も行位初住に居り円教、後有、報土に在り。今と殊ならず、如何。

答て曰く、此の難、不類なり。竜女二尼、女人為りと雖も、真修体顕、即無差降の高位に昇りて、自然流人、薩婆若海の徳を具せる、と。今の所談と天懸にして全く比類に非ず。両尼、竜女等の後有、実報に在ることは、只だ応に是れ地住の索多の報土に生ずるなるべし。彼の智者大師、報土得生の機品を定として、地住已上、皆得往生と云うが如し。

問て曰く、天台尊者、霊芝律徳等の諸賢、夫人の得忍を判として倶に「断破無明証入初住」と云えり。若し爾らば、毘提夫人、耶愛竜女と一等にして差(たが)うこと無し、如何。

答て曰く、他師は夫人の無生を高ぶりて以て真因初住に属すと雖も、今家は信位の安心と定めて、解行已上を遮す。今は宗師の

定判に依りて以て語ることを為す。学者、相濫すること勿れ。

問て曰く、女人往生の明文、出でて何れの処に在りや。

答、弥陀の本願に曰く、(29)

設し我れ仏を得たらんに十方の無量の不可思議の諸仏世界に其れ女人有りて、我が名字を聞きて歓喜信楽して、菩提心を発して女身を厭悪せんに、寿終の後、復た女像と為らば、正覚を取らじ」已上。

宗家、此の願文を引きて詳勘して曰く、(30)

義に曰く、乃ち弥陀の本願力に由るが故に、女人、仏の名号を称すれば、正に命終の時、即ち女身を転じて男子と成ることを得。弥陀、手を接し、菩薩、身を扶けて宝華の上に坐らしめ、仏に随いて往生し、仏の大会に入りて無生を証悟す。又た一切の女人、若し弥陀の名願力に因らざれば、千劫、万劫の恒沙等の劫にも終に女身を転ずること得べからず。応に知るべし。今、或いは道俗有りて、女人、浄土に生ずることを得ずと云わば、此れは是れ妄説なり。信ずべからず。又た

(29)『無量寿経』（浄全一・九）。

(30) 善導『観念法門』（浄全四・二三三下～二三四上）。

此の経を以て証するに、亦た是れ摂生増上縁なり已上と。経釈の炳文、見易きが故に註解せず。抑宝樹檀林の春の花は遠く薫を称名の風に伝え、万徳円明の秋の月は遥かに光を持念の窓に耀かす。先聖、言えること有り。(31)

当に知るべし。諸余の苦患は或いは免るる者有り。無常の一事は終に避るに処無し。須く説の如く修行して、常楽の果を欣求すべし已上。

此の言、誠なるかな。五蘊無常なり。孰れか四山の責を免れん。九品易往なり。曷んぞ三字の勤めを怠らんや。南無阿弥陀仏。

魔不能便勝 第四十三

夫れ牟尼至尊の積劫行満なるや。猶お、三女四軍の悩乱を免れず、優婆毱多の証果の聖者なるや。亦た即ち他化天子の留難に値えり。是れ併ら自力断証の致す所なり。然るに吾が門の修行は四魔跡を削り、波旬競を済む。是れ則ち摂取不捨の光益を蒙れる所以なり。経に云く、(32)「光明遍く十方世界を照して、念仏の衆生

(31) 源信『往生要集』（浄全一五・四九下）。
(32)『観無量寿経』（浄全一・四四）。

を摂取して捨てず」已上と霊芝の云く、(33)

当に知るべし、我が輩、仏光の中に処して、都て覚知せず、仏光常に摂して略へて厭棄したまうこと猶し盲人の日輪の下に居るが如く、又、溷虫の楽いて穢処に居るが如し。膺を撫でて自ら責めて実に悲痛す可しと已上。

楞厳の云く、(34)

我れ亦た彼の摂取の中に在れども、煩悩に眼を障えられて見たてまつること能わずと雖ども、大悲倦むこと無くして、常に我が身を照したもうと已上。

又た霊芝律徳の云く、(35)

大光明の中には、決して魔事無し。猶し白昼に奸盗成じ難きが如しと已上。

加之(しかのみならず)、基公、感師、志を一にし、力を勠せて倶に浄土の行人には全く神鬼魔の留難無しと曰えり。

問て曰く、『法華』には「若魔若魔子皆不得便」(36)と説き、神咒には「魔鬼鄣礙皆消滅故」(37)と宣べたり。又た『金剛頂経』に云

(33) 元照『阿弥陀経義疏』(浄全五・六七七下)。
(34) 源信『往生要集』(浄全一五・八五上)。
(35) 元照『観経義疏』(浄全五・三六三上)。
(36) 『法華経』(正蔵九・六一上)。
(37) 玄奘訳『十一面神呪心経』(正蔵二〇・一五二上～中)。

く、[38]

彼の釈獅子、皆な無比陀羅尼、瑜伽法を獲得するに由るが故に、魔軍を摧破して一切を利楽すと。又た云く、若し諸の魔等、暴悪の者有れば、此の人の所に於て、皆な歓喜を生ず、と。

又た云く、[39]

凡そ行者、勝善の事を求むるに、悪魔障礙して常に人の便を伺いて、或は屏廁の処、或は穢悪の処にして能く悩害を為すことを被る。応に密契を以て加護して便りて得せしむること勿れ。

又た云く、[40]「諸の悪鬼神、並に皆摧伏す」と。

又た云く、[41]「『金剛』の上に暴悪の身を現じて魔王憍慢の心を摧伏す」と。

又た云く、[42]

爾の時世尊、諸の行人に告げて言く、上の如く三摩地を修し、已れば現世に無上菩提及び種種功徳の悉地を獲証すること自在にして意の如し。天魔竜鬼、便を伺うこと得ること無し。

(38) 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』（正蔵一八・二二四下）。
(39) 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』（正蔵一八・二二四下）。
(40) 円仁『金記浄地記』（正蔵七五・三八上）。
(41) 覚超『金剛三密抄』（正蔵七五・六八〇下）。
(42) 覚超『金剛三密抄』（正蔵七五・六九一下）。

人天敬重して一切の事業、速疾に円満す已上。

又た『出生菩提心経』に云く、(43)

爾の時、仏彼の波羅門に告げて言く、此の三千大千世界に百俱致（梵語には俱致、此に数千万と云う）の諸魔宮殿有り。彼の一一の魔に俱致数の魔衆眷属有りて囲遶せり。彼の諸の魔輩、常に方便を勤めて此の経を滅せんと欲して種種の因縁を作す。彼の因縁に因て所在の処に随いて、諸の障礙を作す。所以（ゆえん）は何ん。若しは三千大千世界の所有の衆生を以て、皆悉く阿羅漢果を得。若しは善男子善女人有りて、此の修多羅を聞き已らば、当に阿耨多羅三藐三菩提心を発すべし。婆羅門、是の因縁を以て俱致数の諸魔をして方便を勤求して、此の経を滅せんと欲せしむ。所以（ゆえん）は何ん。此の修多羅は是れ一切諸法の種性根本なり。是の義を以ての故に俱致の諸魔方便を勤求して、此の経を滅せんと欲す。爾の時に仏波羅門に告げたまわく。今、修多羅有り、名て破魔衆会と汝等（なんだ）ち受持読誦せば、即ち彼の魔天衆会を破することを得。乃至爾の時世尊、即ち陀羅尼を説て曰く

(43) 出典不詳。

云云之を以て之れを観れば、円密の行者も亦た魔障を撥却する者なり、何如ん。

答て曰く、夫れ聖道の修行には波旬競い襲わざるに非ず。襲来すれども行人故さら自力を励して之れを対治す。浄土の勤修には元来(もとよ)り魔王強弩を張らず。魔民甲冑を著せざるが故に、対治魔事の方法を闕くのみ。夫れ競と競わざると、治と不治と、その優劣判然たり。夫れ重瘵に嬰りてに耆扁が治療に値わんと。之れ五内に恙が無くして葛華が秘方を用いざるると、憂喜其れ何如んぞや。学者商量せよ。

問て曰く、『法事讃』に曰く、(44)

仏、衆生の四魔の障あって、未だ極楽に至らずして三塗に堕せんことを恐る。直心をもって実に行ずれば、仏迎来したまうと已上。

所判の如くんば、浄土の行者に魔障有るが故に、如来来応を垂れたもう者をや。

答て曰く、実に魔事無し。且く是れ余教に因準するの解釈なり。

(44)『法事讃』(浄全四・二下)。

定執を生ずること莫れ。矧(いわん)や又た是れ如来の対治にして、行者の期心に非ず、所以に聖道に異り、学者知ぬべし。

問て曰く、『観念門』に云く、(45)

又た行者等、眷属六親、若し来りて看病せば、酒肉五辛を食せる人有らせしむること勿れ。若し有らば、必ず病人の辺りに向うること得ざれ。即ち正念を失して鬼神交乱し、病人狂死して、三悪道に堕す。願ば行者等、好く自ら謹慎(つつし)みて仏教を奉持して固く見仏の因縁を作せと已上。

解釈炳焉(へいえん)なり。西方の行人専ら波旬の留難に値いて、往生の大益を失する者ならん。

答て曰く、是れ亦た縦逸に不浄の凶党(あくとう)をして聖衆来迎の梵場に近づけざらしめんと欲して、一往抑止方便の厳制を加う。二往は然らず。智人、自ら知れ。

瑛師の『修証儀』に云く、(46)

彼は五陰を以て境と為し、境は是れ生死幽暗の法なり。十乗の理観を以て之れを研くに、能く九境の魔事を発す。『楞厳』

(45) 善導『観念法門』（浄全四・二二七上）。
(46) 択瑛『修証儀』、散佚の為出典不詳。

に説くが如きは、皆な五陰に由るが故に、魔の現るること有りと。是を以て諸経論伝に、凡そ修観を明すに、並びに出魔の事を弁ずることを須ゆ。恐らくは其の現ずる時、行人識らずして若し取著を生ずれば、即ち群邪に落ちるが故なり。此れは弥陀を以て境と為し、境は是れ果人にして清浄の功徳なり。十乗の行満じて永く十境の魔事を絶す。是れを以て浄土の一門、諸経論伝には皆な魔事有りと言わず。故に知ぬ、但(ただただ)能く経に依て想を作せ。心に邪念無くんば、則ち聖境現前し、光明顕発して能く自己の幽暗を破し、五陰の生死を滅するなり已上。

文見易きが故に註せず。夫れ生死交り謝る。一生の光陰幾か有り。去来不定なり。万物の運為常無し。四大零落して移り易く、五蘊遷変して留ること無し。抑(そもそも)、轟轟たる輪転、更に始め無し。過去亦た過去、幾計(いくばく)の輪廻ぞや。悠悠たる生死、亦た終り無し。未来亦た未来、何計(いくばく)の経歴ぞや。爰に渡りに舩を得、闇に明に値えり。謂く超世の大願是れなり。一たび南無と称すれば、五逆忽に消え、

常念執持すれば上品上生す。『十二仏名経』に云く、[47]

若し人、仏名を持てば、衆魔及び波旬、行住坐臥の処、其の便を得ること能わず已上。

南無阿弥陀仏。

鶴林帰嚮勝 第四十四

夫れ、真言明妃陀羅尼蔵の犯重の人を化するや。只だ康日修入の彙を済い、大乗十二分教の首題、逆謗の徒を利するや。未だ終焉誦持の機を扶けずして、爰に吾が浄土の教益は然らず。一形造悪の愚人等、与果現前の時、初めて善知識の超世大願の玄極を説きて、転教口称せしむるに値いて、僅に心念語唱す。于の時に弥陀至尊、本願を捨てたまわず、来りて大悲に応じたもう。聖衆来迎するが故に、刹那の頃に於いて、西方に即詣す。斯の如き勝妙の事、諸教の中に於いて闕けて書せず。唯だ弥陀教中のみ特り獲麟廻心の巨益を明すのみ。智人商量せよ。

曰く、敢て問う、曰く、王舎城中所説の『阿弥陀経』に曰く、[48]

(47) 闍那崛多『説十二仏名神呪校量功徳除障滅罪経』（正蔵二一・八六二中）。

(48) 『観無量寿経』（浄全一・四九）。

下品上生の者とは、或いは衆生有りて、衆の悪業を作る。方等経典を誹謗せずと雖も、此の如きの愚人、多く衆悪を造りて慙愧有ること無し。命終らんと欲する時、善知識の為に大乗十二部経、首題の名字を讃ずるに遇えり。是の如きの諸経の名を聞くを以ての故に千劫の極重の悪業を除却す。智者復た教えて合掌叉手して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に五十億劫生死の罪を除く。爾の時、彼の仏、即ち化仏、化観世音、化大勢至を遣わして、行者の前に至らしめて讃じて言く、善男子、汝、仏名を称するが故に諸罪消滅せり。我れ来りて汝を迎う[已上]。

夫れ末後の念想は、生死の折角なり。鶴林の称名は往生の正因なり。故に大善知識、慈悲老婆心を以て、十二部経に代りて、六字の尊号を唱せしむ。嗚呼(ああ)宜なるかな、一念称揚の力は殆ど十二分教を誦持するに超えたり。須臾持念の功は、頗る諸仏の名号を唱念するに過ぎたり。然れば則ち、念仏三昧の功徳は、婆伽至尊猶お測量に泥み、底下の愚童、豈に竿許(さんきょ)することを得んや。凡そ

驪珠を得ざれども、七宝の国土に遊び、神丹を服せざれども、無量寿域に到る。只だ是れ、本願名号の不共の別徳なるのみ。檀摩訶毘尼衍の往躅、此の中に応当に広く説くべし。抑、瞑目気絶の迴心は、薩埵の本誓より起こり、眼光落地の仰頼は下輩の三品に明かなり。行者心を留めて思量せよ。於、曠劫会稽の耻辱を終焉の一念に断雪め、無始輪環の縲紲を無後の十声に断つ。寔に陣に臨んで、矢を作れども、猶お勝つことを得、渇に臨んで井を掘れども、善く喉を湿すと謂いつべし。胡ぞ、思議すべけんや。

曰く、敢て問う。曰く、設い円密二宗の諸経の中に、臨終初心の人の直ちに生死を截断するの義相を明すこと有りと雖も、只だ是れ三学式内の得益にして、全く六字格外の大利には非ず。学者商量せよ。夫れ沙羅林色を変ずるや。月輪猶お二月三五の夜雲に隠れ、白鷺池に水涸くるや。青蓮亦た五濁悪世の春嵐に萎めり。三界の特尊も留まらず。十地の聖人も同じく去る。具縛の下凡、豈に然らざらんや。所以に朝に官禄に誇る人も暮には岱邙の煙と昇り、昨容餝を綷とせしの彙いも、今は郊原の塵に交る。南無阿

弥陀仏。

仏前重説勝 第四十五

夫れ八事の開遮には崛内・崛外の諍い有り。五部の異執には大衆・上座の論有り。是れ則ち親り如来の前に於て之れを沙汰せざる所以なり。然るに今此の『観経』は大徳牟尼婆伽、耆闍崛山従り没して、王宮に於て正しく国母毘提の為に十六想観の方軌を直示し、侍者慶喜、王舎大城自り還りて鷲嶺に在りて、親り教主慈尊に向うて九品往生の始終を重説す。

『経』に云く、(49)

爾の時世尊、足虚空を歩みて耆闍崛山に還りたまう。爾の時阿難、広く大衆の為に上の如き事を説くに、無量の諸天及び竜・夜叉、仏の所説を聞きて皆な大いに歓喜して仏を礼したてまつりて退きぬ已上。

『疏』の第四に之れを受けて曰く、(50)

耆闍会の中に就いて亦た其の三有り。一に「爾時世尊」従り

(49)『観経』（浄全一・五一）。
(50) 善導『観経疏』（浄全二・七一下）。

己下は耆闍の序分を明かす。二に「爾時阿難」従り已下は耆闍の正宗分を明かし、三に「無量諸天」従り已下は耆闍の流通分を明かす已上と。

又た玄文に云く、(51)

此の『観経』一部、両会の正説なりと言うと雖も、総じて斯の一を成ず已上と。

夫れ三百余会の転法輪を案ずるに未だ両会の重説は有らず。只だ吾が浄土の一教のみ此の秀句有り。尤も以て一勝と為るに足れり。

抑(そもそも)『涅槃』の第二十三に云く、(52)

人身得ること難きこと、優曇華の如し。我れ今已に得たり。如来、値い難きこと優曇華に過ぎたり。我れ今已に値えり。清浄の法、実に見聞すること得ること難し。我れ今已に聞く。猶し盲亀の浮木の孔に値えるが如し。人命停まらざること山水よりも過ぎたり。今日は存すと雖も明らかなんまで亦た保ち難し。云何ぞ心を縦にして悪法に住せしめん。壮なる色の

(51) 善導『観経疏』(浄全二・三下)。

(52) 曇無讖訳『大般涅槃経』(正蔵一二・四九八下)。

停まらざること、猶し奔(はし)れば馬の如し。云何ぞ恃(たの)怙んで憍慢を生ぜんや已上。

南無阿弥陀仏。

発願叮嚀勝 第四十六

夫れ文子三たび思いて之を行う。故に政途に錯り無く、子路短慮にして之を射る。故に孔聖志を失す。是れ則ち弥陀諸仏、発願の差、異与を云うが、原ぬるに夫れ五百二六の大願は、未だ必ずしも重慮思察せず。六八超世の本誓は、懇懃に五劫に思惟し玉う。於戯(ああ)喜しきかな、無諍念王照機の眼は、常に三学分外の凡愚を視(そな)はし。法蔵薩埵大悲の涙は、鎮えに五逆衆生の頂上に灑ぐ。大悲闡提の宏誓は、成熟を空中の讃言に証し、三僧祇耶の行願は重修を衆生の称念に譲る。以故(ここをも)て、微塵の布施だも行ぜざれども、檀度を円満し、毫釐の禁戒だも持たざれども、木叉を具足す。乃至一巻の経典だも誦せずして波若を究竟することは、是れ則ち大悲本誓の加持する所以になり。是故称名功徳無尽の所判、思て知ん

ぬべし。宜きなるかな。三名の至尊、摩竭に室を揜しかば、忽に先漸後頓の梯橙を得。万乗の明君、遠方に智を買しかば、速に悞逆堕囹の苦報を免る。之を以て之を観れば、思惟観察の法は、是れ殊絶特妙なる者のをや。於戲(ああ)法蔵の願舩を盪いままにするや、以て津人の機巧にも過ぎ、弥陀の誓車を機(あやつ)るや。更に断畚の秘術にも超えたり。智人自量せよ。曰く敢えて問う。曰く、薬師如来本願経に云く、

仏曼殊室利に告げたまはく、彼の仏世尊、薬師瑠璃光如来、本と菩薩の行を行じ玉いし時、十二大願を発す。(乃至)此の十二大願は、是れ彼の世尊、薬師瑠璃光如来、応供正遍知、菩薩の行を行じ玉いし時、本昔所作なりと(已上、唐訳之に同じ)。

悲華経第六に云く、

爾の時仏寂意菩薩に告げたまわく、善男子、時に宝海梵志、是の思惟を作さく、我今已に無量無辺百千億那由他の衆生を勧めて、阿耨多羅三藐三菩提に住せしむ。我今是の諸の大菩薩を見るに、各各に発願して浄仏土を取る。唯だ一人を除く、

婆由毘紐、此の賢劫の中、余の菩薩は亦た五濁を離る。我今当に是の未世の中に於いて真の法味を以て、諸の衆生に与うべし。我今当に自ら堅牢荘厳して諸善願を作して、師子の如く吼して悉く一切の菩薩をして、聞き已りて心に疑怪を生じて、未だ曽て有るなりと歎ぜしめんと已上。

又た悲華の第三に云く、

爾の時聖王、是の語を聞き已りて乃至我れ先に已に七歳の中に於いて、端坐思惟すてく、種種に清浄の仏土を荘厳せん。世尊我れ今発願して、我をして阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと欲せしめん。時に世界の中に地獄畜生餓鬼有ること無し等文。又た双巻に云く、爾の時に次に仏有します。世自在王如来と名づく。時に国王有り。仏の説法を聞きて、心に悦予を懐きて、尋ちに無上の正真の道意を発して乃至一切世間、能く及ふ者の無し。五劫を具足して、荘厳仏国、清浄の行を思惟し摂取す乃至法蔵比丘、此の願を説き已りて、頌を説きて曰く、斯の願若し剋果せば、大千応に感動すべし。虚空の諸

の天人、当に珍妙の華を雨ふらすべし。仏阿難に告げたまはく、法蔵比丘、此の頌を説き已るに、時に応じて普地、六種に震動し、天より妙華を雨ふらして、以て其の上に散らす。自然の音楽あて、空中に讃じて言く、決定して必ず無上正覚を成ぜんと、是に於いて法蔵比丘、是の如くの大願を具足し修満して、誠諦虚しからず。世間に超出して、深く寂滅を楽へり已上と。

学者委く三部大乗の明文を読みて三尊本願の優劣を詳にせよ。『十因』に三尊本誓の高卑を詳勘して曰く、(53)

誠に弥陀の願は少縁の悲願に非ず、大悲に勝えずして不可得の願を立てたまえり。彼の薬師の如きは得菩提持と立れども、不取正覚と誓わず。又た千手の如きは不取正覚と誓えども、猶未だ菩提を証得せず、而るに我が法蔵比丘は恐らくは不取正覚と誓いて成仏より以来た今に於て十劫なり。随て十方従り彼の国に生ずる者、猶し駛雨の如し、不可得の願なりと雖も、今は已に満足したまえり。是れ幾許く修行の功ぞや。

(53) 永観『往生拾因』(『浄全』一五・三九一下)。

是れ幾許く大悲の力ぞや。誠に以て不可思議、不可思議なり已上。

卓朗の智人心を経釈に留めて九たび之れを思え、九たび之れを思え。抑（そもそも）、極愛一子、地の発願なるが故に慈悲最尊なり。一切自在位の能化なるが故に引接無礙なり。孰れの道人は帰せざらんや。何れの行者か憑ま弗んや。

問て曰く、『悲華』の文に釈迦本師の五百の大願を説くとして「宝海梵志、作是思惟[54]」と曰えり。此れ豈に他仏の発願に非ずや、思惟有るにや。

答て曰く、全無と語うには非ず。只だ長短に就いて其の浅深を論ずるのみ。夫れ無静念王の習種の位に在りて本誓を発せんや。兆載の沈思を重ねて清浄の仏土を摂取し、曇摩大士の聖種の初めに居りて別願を立せんや。五劫の重慮を積みて卓然の妙行を撰定す。今昔異りと雖も只だ是れ吾が弥陀の因位所発の超世の大願なり。此れ豈に暫時思惟の諸仏の本願に斎しからんや。智眼を具るの人、両経の炳文を看て之れを詳勘せよ。抑、弥陀覚王は三学分

(54)『悲華経』（『正蔵』三・二〇三下）。

外の群品を亭毒せんと欲して曩劫に大悲闡提の宏誓を発し、牟尼薄伽は煩悩賊害の蒼生を抜済せんが為に、今日出世素懐の浄教を宣べたまえり。今古殊すと雖も郢匠一致なり。大凡因位の本誓と果上の汲引と、全く差殊無きこと、権衡にも超え、符璽にも過ぎたり。然れば則ち接凡の誉を古今に著し、甚深の弘誓は朝野に満つ。孰れか帰仰せざらん者をや。

問て曰く、法蔵所発の四十八種の誓願は、立て已るに自然に六八を成ずるか、将た又た幟幟有りや。

答う、幟幟有り。且く覚鑁闍梨の『阿弥陀の秘釈』に曰く、(55)

比の尊、不増不減にして四十八願を発すこと、必ず所表有る可し。例せば薬師の十二上願は時月年迴を表し（十二神将之れを思う可し）釈迦の五百大願は五住塵点を表するが如き是れなり。

謂く、龍樹の釈、『大衍論』の中に所帰仏に於て八万四千四十八種の功徳を挙げて、之れに帰命す。(56) 八万四千を言わば、則ち色相の功徳なり。四十八と言うは、心相の功徳なり。色相は即ち弥陀の相好光明なり。心相は即ち弥陀の誓願海なりと。故に知ぬ。

(55) 出所不明。

(56) 龍樹『釈摩訶衍論』「頌曰　総八万四千四十八種徳　最勝等各十　智無礙各四　及八万四千　色相差別故　功徳雖無量　終不出此数、論曰　馬鳴菩薩総挙八万四千四十八種功徳。奉仰讃歎無上大覚。」（正蔵三二・五九五上）

因位の四十八願を以て果満の四十八種の功徳を得るなり。然るに龍樹は是れ釈迦の記別を得て極楽の一聖なり。彼の所帰、必ず弥陀なる可しと。又た『秘説』に云く、[57]

儀軌の中に弥陀の曼荼羅を説くに、中台は観音八葉八仏なり。是れ則ち観音大悲の因開けて弥陀の八智の果徳を成ずるの義なり。然るに観音の大悲に六道同体の形声有り。彼の六道の衆生に各本性の八葉心蓮有り。合蓮華の如し。彼の六道の八葉の心蓮をして各開敷せしめんが為に、六八四十八の願を発したもう。之れを秘す可しと已上。

此の義は即ち是れ真言密教の所談なり。今亦た六八の誓願に幖幟有るの義を存す可きなり。之れに就いて両門の分別有る可し。所謂、一には曰く、能化に就いて之れを解し、二には曰く、所化に就いて焉を判す。初に能化に就て解すと言わば、四つとは、四念住、四正断、四神足、四無量心、四弘誓願、四摂、四波羅蜜、四親近、四無礙弁、四無畏、四諦理、四仏、四徳波羅蜜、四百戒田教、四門、四菩薩、四種曼荼羅、四種法身、四智等諸、四種功徳

(57) 出所不明。道範『秘密念仏鈔』に「秘蔵義に云く」（『続浄』一五・九八上）といって同文を引用している。

是れなり。十とは、十度、十力、十種法行、十功徳、十乗、十境、十如、十無尽戒、十善、十戒、十地(四乗十地)等の諸善功徳是れなり。八とは、八葉、八供、八諦、八金剛、八定、八法、八万法門、八音、八念、八犍度、八徳、八教等、諸の八種の功徳なり。此れ等の四十八種の功徳は因位果上の徳能なり。然るに吾が阿弥陀如来、此の如く四十八種の功徳を具足し成就せることを表さんと欲して六八の弘誓を発起したもう。已上能化に就て以て四十八の義を解し、竟(おわん)ぬ。

二に所化に就て判ずと言わば、四とは、四倒、四苦、四悪趣、四州、四重、四有、四生等なり。十とは十波羅夷、十悪、十纏等なり。八とは、八苦、八倒、八熱、八寒、八州、八部、八難、八逆等是れなり。弥陀覚王普く斯れ等の四十八種の群品を摂化したもうや。此の義を表さんが為の故に六八の大願を建立したまえり。

問て曰く、『双巻』の異訳に、皆な二十四願を結得すと云えり。若し爾らば従上幖幟の義、更に成立せず如何。

答て曰く、三八と之の六八と只だ是れ開合の異のみ。或いは又た他訳正しからず、僧鎧直に翻ず。所以は何ん。鎧訳の願数、深く『観経』と『智論』とに符契するが故なり。

曰い敢う問て曰く、比の難非なり。幖幟相配の勘詳は今に適たるに非ず。謂く『法華』の文に一百二百、或至三十経、二十年執作家事と説くが如きは、又た八十竿題の表示にして即ち其そ例なり。此の例一に非ず。南北の智人、自ら知れ、居や夫れ超世大願の教迹は是れ不朽敗の雲薬なるが故に八熱那落の猛焔にも燋れず、六字尊号の妙行は迺ち不亀手の妙薬なるが故に、八寒泥梨の堅氷にも閉られず。孰れか之れを仰頼せざらんや。静に以れば、如意宝を雨し、磁石鉄を吸い、方諸水を招き、琥珀塵を去く。此の四つの物、豈に識有らんや。然れども皆な神異有りて善く霊用を顕す者なり。吾が弥陀世尊、十地の高位に登り、五劫の思惟を重ねて、建立したもう所の大願、豈に無窮の巨益を施さざる容ならんや。原るに夫れ三大僧祇の行願は、全く他事に非ず。百千万種の善根は、只だ我等が為なり。已に久修業の妙因に依りて、今、

最正覚の大果を成じて所得の功徳を以て、以て三学の九香と為し、普く一切の衆生に施したまえり。若し行人有りて之れを唱念せば、念念皆な万徳を包るることなり。摩尼の七珍を雨すが如し。声声悉く衆罪を滅することなり。同じ金剛の万物を摧くに、之れを明月神珠に類し、之れを竜泉太阿に喩うこと、誠に以えん有るかな。於戲(ああ)、昔し見し人は今は無く、只だ空き跡を諮い、今は聞いた類忽に去りぬ。徒に墳辺に臥す。先賢言えること有り。「指を折りて古人を計れば、親も去り、疎も去りぬ。目を塞ぎて往事を思えば、悦恨皆な空なりと云云。夫れ晨夕梵鐘の響は、響き毎に無常念念に至ることを示し、夙夜螺鼓の音は、音毎に死王歩歩に来ることを覚しむ。

南無阿弥陀仏

来迎殊絶勝第四十七

夫れ良導師の誘引に匪れば、五百の宝処至り難く、大舩師の済渡無くんば、万里の煙波超え叵し。覩率西方の往生、豈に導師の

教示無からんや。所以に『上生経』に云く、[58]

弥勒菩薩、眉間白毫、大人相の光を放ちて諸の天子と与に曼陀羅華を雨して此の人を来迎すと已上。

又た『双巻経』に云く、[59]

設し我れ仏を得んに、十方の衆生、菩提心を発し、諸の功徳を修し、至心に発願して我国に生ぜんと欲し、寿終の時に臨んで、仮令大衆に囲遶せられて其の人の前に現ぜざれば正覚を取らじと已上

『観経』に云く、[60]

阿弥陀如来、観世音大勢至、無数の化仏、百千の比丘、声聞大衆、無数の諸天、七宝宮殿と観世音菩薩は金剛台を執り大勢至菩薩とともに行者の前に至り、阿弥陀仏、大光明を放ちて行者の身を照し、諸の菩薩と手を授けて迎接したもう。観世音、大勢至、無数の菩薩とともに行者を讃歎して其の心を歓進す。行者見已りて歓喜踊躍し、自ら其の身を見れば、金剛台に乗じて仏後に随従す。弾指の頃の如くに彼の国に往生

(58) 沮渠京聲譯『仏説観弥勒菩薩上生兜率天経』（正蔵一四・四二〇中）。
(59) 『無量寿経』（浄全一・七）。
(60) 『観無量寿経』（浄全一・四七）。

すと已上。

又た、『光明真言儀軌』に云く、「若し墓処に置いて四十九遍を誦せば、必ず無量寿如来、斯の霊を荷負して、決定して極楽浄土に生ぜしむ」[61]と。又た云く、「亦た常に誦持する人を無量寿如来、荷負して極楽浄土に生ぜしめて、三十二相、八十の荘厳を具足して、速に正覚をぜしむ已上」

夫れ若しは迴願抜済にまれ、若しは自身往生にまれ、皆な同じく弥陀荷負授手して、浄土に至らしめたもうこと、焉んぞ思議す可けんや、焉んぞ思議す可けんや。夫れ二処倶に来迎有りと雖も、迎相の優劣、天懸はるかなり。

問て曰く、安養覩率二処の来迎に何等の勝劣有りや。

答て曰く、略して四の優劣有り。一には、曰く化主の勝劣なり。謂く菩薩は狭小の身なり。三十二種の相好、円ならず、弥陀は広大の身なり。八万四千の妙相厳顕なり。

二には、曰く、光明の勝劣なり。弥勤は唯だ眉間毫光の一種を放ち、妙雲は普く遍身無数の大光を放ちたもう。

(61) 出所不詳。頼瑜『秘鈔問答』（『正蔵』七九・三四七上）に「別儀軌に云く」として引用有り。

三には、曰く、眷属の勝劣なり。謂く逸多は都率天子と倶に来り。清浄は化仏菩薩とともに同じく迎えたもう。

四には、曰く、散華の勝劣なり。謂く、慈氏は唯だ曼陀羅華を雨し、甘露は種種微妙の宝華を雨す。今略して四種の優劣を挙ぐ。具に計らう可からず。自余の糸竹等の形声の高卑、準説して知りぬ可し。

問て曰く、『西方要訣』に云く、「捨生の不同とは、命を捨てて天に生ずるには人の接引する無し。若し浄国に生ずるには聖衆来迎す」[上巳]と。奚そ経と相違するや。

答て曰く、『要集』の中に基感両師の来迎有無の勘判を載すと雖も、未だ通会せず。楞厳の心中、暗に以て知り難し。今謂く、『要訣』は『上生経』の明文に違す。孰れか妙判なりと云わんや。或いは又た試に二義を以て基公の意を会せん。一には、曰く、弥勒には来迎の願無きが故に。接引の力、是れ最大なるに非ず。故に無に属す。例せば小力を無力と名づけ、小監を無監と言うが如し。

二つに、曰く、慈氏の来迎は仏迎の厳重なるにはしかず。故に

劣を呼びて無に属すや。此の義、今に適たるに非ず。譬えば悪子を無子と名づけ、賤人を無人と言うが如し。又た七義勝の中の来迎勝、之れを思う可し。

問て曰く、弥陀如来、何の故有りてか来迎引接の益を垂れたもうや。

答て曰く、黒谷尊師の云く、「来迎に三義有り。一には曰く導師誘引の為、二には曰く四魔降伏の為、三には曰く行者摩頂の為なり」云云[62]夫れ他力の本誓を憑むは鎧を著けて陣に入るが如し。自力の諸度を励すは白身にして戦いを交るに似たり。行者能く斟酌す可し。抑、一切衆生等、無身有身、無識有識従りた、或いは人中天堂の浪上に浮びし時も有り、或いは三途八難の海底に沈みし時も有り、浮沈倶に輪廻を免れず、苦楽同じく牢獄に繋在す。之れを為ん。偶、仏教に値て毘尼三昧を受くと雖も、戒珠に瑕類多くして、未だ二種生死の長夜を照さず、定水波瀾に悪しくして三身円満の明月を浮べず、既に三学十度の資糧を闕け、定て六道貧里の飢饉に沈まん者か。嗚呼痛しいかな、世世に魔王呵責の音を

(62) 出所不明。

聞き、生生に防羅鞭撻の苦を受く。今度猷捨せずんば将来も亦た懊悩すべし。行人思察せよ、行人思察せよ。夫れ寔に修し叵きは真実の妙行、居最も値い難きは有縁の要法なり。然るに今、或は経巻に従い、西方の捷径を悟る。奚んぞ之れを勤修せざらんや。夫れ或いは知識に従いて別願の玄極を聞く。豈に懈緩なる容んや。居抑、西方行者等、若し心諾違せずして劔を墳に還り、忠貞金の如くにして敵衣を撃ちて死せば、蓮華に乗じて西に詣んこと近きに在り。瑞草に坐して覚を成ぜんこと幾ならず。経に謂わる生諸仏家、当坐道場という是れなり。抑、金烏留め難く一形の間、只荘周の孤夢の如し。白駒過ぎ易し。千秋の程も亦た廬生が一睡に似たり。

南無阿弥陀仏。

自作他受勝第四十八

夫れ君父の七珍を賜うや。臣子速に富有に誇り、良医の播や百療をほどこす。疾者忽に病痾を除く。是れ則ち自ら営求せずして、

富貴の身と成り、手ずから擣篩せずして除瘵の益を得るの謂いなり。持名行者の迴願の功力、夫れ然らざらんや。且く海東の元暁師、『遊心安楽道』に云く、[63]

問う、親く善縁に遇いて九品の生に預る。頻に文義を見て、憤心の雲披けぬ。若し衆悪有りて、修善を識らずして已に三途に入る。方便して彼の亡霊を救う有りて業障を除き極楽界に生ぜ令むと為んや。

答う、愚情通じ難し。聖教に術有り。故に『不空羂索神変真言経』の第二十八巻の「灌頂真言成就品」に曰く、

爾の時、十方一切刹土の三世一切の如来、毘盧遮那如来、一時に皆な右の無畏手を伸べて清浄蓮華明王の頂を摩きて、同じく不空大灌頂光明真言を説きたもう。唵（喉中擡声引呼一）荷暮伽廃（無計反）嚕者娜（二）摩訶畝陀（能乙反）囉麼枳（三）鉢頭（二合）摩入縛囉（四）跛（二合）囉韡野糾（五）若し衆生有りて処に随て此の大灌頂光明真言を聞くことを得て、二三七遍耳根に触るる者は、即ち一切の罪障を滅除することを得、若し諸の衆生、具さに十悪五逆四重の諸

(63) 元暁『遊心安楽道』（正蔵四七・一一九中～下）。

罪を造て、猶し微塵の斯の世界に満るが如くして、身壊命終して諸悪道に堕すども是の真言を以て土沙を加持すること一百八遍して屍陀林の中で亡者の屍骸の上に散じ、或は墓上に散じ、皆な之れを散ずるに遇わば、彼の亡き所の者、若しは地獄の中、若しは餓鬼の中、若しは修羅の中、若しは傍生の中、一切不空如来、不空毘蘆遮那如来、真実本願、大灌頂、光明真言、加持土沙の力を以て、時に応じて即ち光明の及び身の諸の罪報を除き、所苦の身を捨てて、西方極楽国土に往くことを得。蓮華に化生し、乃至菩提に至るまで、更に堕落せずと。此れ等の経文、往往在り。悔なるかな、罪業自ら造りて苦果影のごとくに追うことを。痛ましいかな独困独厄にして、人救護すること無し。同体の大悲弘済の秘術に非る自りは、誰れか能く遠く幽鍵を開けて扶を華台に昇らしめん。他作自受の理無しと雖も、縁起難思の力有り。則ち知ぬ、咒沙に遇えば即ち有縁を成ず。若し沙を被らずんば何ぞ脱期を論ぜん。惟れば夫れ大悲無方にして長舌誤誑すること無し。

信ぜずんばある可からず。後悔すども及ぶこと無からん。然れば則ち信用せざる者は徒らに厚恩を負いて、報ずるの日、転た遠し。順行する者有れば魂を華蓮に接して孝順便ち立つ。幸に真言に逢えり。出さ令めんこと難からず。凡百(およ)そ君子誰か奉行せざらんや。沙を墓上に散るに、尚お彼の界に遊ぶ。況や衣を呪して身に著し、音を聆き、字を誦せん者をや

已上と。

抑(そもそも)、自作他受の義、文に在りて分明なり。理を得て掲焉たり。行者怪むこと莫れ。

難じて云く、『枢要』の上に云く、(64)

若し諸の種子の果を生ずるに、応に取るべしというは、所香の中に同身にして相離に非ずと即ち亡人の為に説くを七斎追福す。何ぞ他の作すこと有るに、而も自身に勝果等を受ることを得るや。又た異趣の身、如何んが果を受るや。有るが解すらく、前趣に善悪の相有り。受罪の者をして能く善心を発せ令む。又た経に云く、「地獄等の上に白黒の幡有りて、善

(64) 基『成唯識論掌中枢要』(正蔵四三・六三一上)。

悪の相を表して彼の罪人をして善心を発さ令むるが故に。若し爾らば、鬼畜人天、白黒の幡無し。応に果を受けざるべしと。有るが解すらく、但だ是れ後俗を化せんとして語らず。何ぞ必ずしも果を得ん。我殺は我上に還る。走り避るとも難きが故に。又た解すらく、作願に由る者、勝願資するが故に、受罪の者をして七分に一を得。又た亡者、曽処分に善悪の事を作すこと有るに、現在の為に作果して本心を遂ぐ。故に果報の同趣を受く可き有り。異趣は成ずこと難しと上已。

又た『大乗義章』第九に云く、(65)

問て曰く、仏法に自ら作して他人報を受ること有ること無し、亦た他作して自己果を受ること、菩薩何ぞ己が善法を廻して他人に施与することを須るや。設令、之を与うとも、他人云何ぞ此の善利を得んや。釈して言く、仏法に自業をもって他人果を受ること無く、亦た他業をもって自己報を受くること無しと雖も、彼此互相に助縁すること無きに非ず。相い助くるを以ての故に己が善を以て廻して彼に施すことを得、

(65) 浄影寺慧遠『大乗義章』（正蔵四四・六三七上）。

迴向するを以ての故に、未来世に於て常に能く捨せず、衆生を利益して助けて善を修せ令む。故に迴向を須ゆ。又復、迴向は即ち是れ己が家の能化の因なり。廻向力の故に未来世の中に衆生見る者、敬順して法を受く。即ち是れ己が家の能化の果なり。良に以れば、仏法は自作自受の故に須く迴向するを以て己が家の能化の因を成じ、未来世に己が家の能化の果を成就して、堪能く物を益せ使むべしと已上。

夫れ基公は是れ玉華の鸞鳳、遠師は亦た学山の竜象なり。今、孰ぞ彼の両賢英俊の高判に背いて、自作他受の義勢を存するや。

答て曰く、通途の所談を以て別益の難思を疑うこと莫れ。暁公已に雖の言を下す。択法眼を具せんの人、之を観つ可し。矧んや又た『枢要』第三の答、七分得一の義を許せり。是れ尤も自作他受の義相なり。学者等基公をして坑に堕せ令むること莫れ。

問て曰く、夫れ元暁大師は是れ華厳伝灯の英雄為り。不空羂索は亦た光明真言の霊徳を明す。若し爾らば、今、之を引きて自宗の光華に備え叵き者をや。

答う、此の難非なり。夫れ暁公は浄教を闡揚す。豈に異人ならんや。神咒は安養の正業なり。胡んぞ他宗ならんや。宗証英豪の詳勘、傍依経軌の説文なり。尤も以て自門の援拠と為るに足れり。南北判教の智人、自ら知れ。

曰い敢て問て曰く、明妃既に爾り。尊号闔んぞ然らんや。又た解すらく、光明真言の儀軌を以て之れを観ずれば、光明神咒は即り是れ弥陀覚王の心中心咒なり。若し爾らば無量寿如来の大小両咒と其の功力と全く同じ。大小の二明は亦た即ち十念の宝号なり。若し此の義篇に就て之れを論ぜば、光明真言の勝利は全く是れ弥陀霊号の妙用ならんや。智者商量せよ。

問て曰く、今従上の所立を聞けば、自作他受の義は広く十方浄土及以び三善に通ず。若し爾らば、奚んぞ特り西方浄土のみに局らんや、何如。

答て曰く、十方浄土の往生は是れ吾宗一門の巨益なり。然る所以は、夫れ浄土宗は総じては六合浄刹の往生を談じ、別しては九品蓮台の即詣を勧むる者なり。然れば則ち十方浄土の往生は当に

吾宗に摂し尽すべきなり。智者自ら知れ。或は三部大阿闍梨来難して云く、夫れ自作他受の法門は是れ真言密宗の建立にして、全く顕宗学者の能く知る所に非ず。其の故は、暁公光明真言の霊徳を帰嚮して以て自作他受の深邃を詳にす。光明神咒、更に他法に非ず。正く是れ吾が密家所用の陀羅尼のみ。若し爾らば顕宗の学者等、真言の神力を争盗して顕行の功能に備う可からず。若し所立の如くんば、喩えば、鹿を以て馬と為るが如く、又た壁を以て石と為るに似たり如何。

答て曰く、難勢自由なり。更に当らずとす。夫れ元暁大師は是れ無畏不空の堂室にも不昇らず、両部灌頂の檀場にも臨まず、只だ是れ最初頓説の妙文を自宗として、独り法界唯心の玄旨を悟るの盛徳なり。若し爾らば、唯々顕宗智海の青竜なる者をや。中ん就く、意に西方浄刹土を欣うて、筆に遊心安楽道を誌す。専ら是れ浄土学山の白象なる者をや。世に僧中の竜象と云える是れ暁公一人の霊徳なるのみ。之を以て之れを観れば、自作他受の良談は正く是れ顕宗浄土の所得にして全く毘盧密乗の得分には非ず。然

れば則ち応に言つべし。密人浄土の巨益を争盗して奸しく真言の徳用に備うと。次に光明真言は密家の珍奇にして是れ顕門の能く知る所に非ずと謂う難に至りては、是れ亦た比興なり。士女の諺に云く、黒鵶（からす）は黒き物を見て以て我が所有と謂えりと云云。孰れか定めん、神咒陀羅尼の功力は唯だ真言行者のみ特に之れを行学すとは、顕経に盛に之れを説き、顕人専ら之れを解せり。顕経に咒を説くとは、『法華』『般若』等の諸経是れなり。顕人咒を解すとは、天台大師等の諸賢是れなり。且く『法華文句』第十に云く、(66)

諸師或が説く、咒とは是れ鬼神王の名なり。其の王の名を称すれば、部落主を敬いて敢て非を為さず。故に能く一切の魍魎を降伏す[一]。或が云く、咒とは軍中の密号の如し。号を唱るに相応すれば訶問する所無く、若し相応せざれば即ち執えて罪を治す。若し咒に順ぜざれば、頭七分に破ん。若し咒に順ずれば、則ち過失無し[二]。或が云く、咒とは、密黙して悪を治すれば悪自ら休息す。譬えば微賤のひと此の国従り逃げて彼の国を誑して王子と称す。彼の国に公主を以て之れ

(66) 智顗『法華文句』（正蔵三四・一四六下）。

にす。瞋にて難事多し。一り明人有りて其の国従り来る主、往いて之れに説く。其の人主に語く、若し当に瞋らん時偈を説くべし、偈に云く、親無くして他国に遊びて一切人を欺誑す。麁食是れ常の事なり、何ぞ労く復た瞋することを作すと。是の偈を説く時、默然として瞋歇(や)みて後、復た瞋らず。是の主、及び一切の人、但だ斯の偈のみを聞きて皆な意を知らざるが如し。咒み亦た是の如し。密默して悪を遮す。余は識者無し[其三]。或いは云く、咒とは是れ諸仏の密語なり。王の先陀婆を索したもうに、一切の群下、能く識ること有ること無し。唯だ智臣のみ有て乃ち能く之れを知るが如く、咒も亦た是の如し。只だ是の一法、偏く諸力有りて、病愈え、罪除きて善生じ、道合す[其四]。此の義に為(よ)るが故に、皆な本意を存じて訳人翻ぜざる、此に在り。悪世の弘経は喜て悩難多し。咒を以て之れを護りて道をして流通せ使む[已上]と。

是れ其の顕人の明妃を解するの蹤跡なり。此の例一に非ず。学者自ら知れ。

問て曰く、他経所説の法門を奪て、自宗良談の秀句に備ること、其の傍例有りや。

答て曰く、有るなり。且く天台円宗の如きは、「遍尋法華以前、諸教実無二乗作仏の文、及び明如来久成説故知並由帯方便故」[67]と定判して、記小久成の誠説を一乗法華の玄極と為り。然れば則ち爾前の諸経の中に儘、二乗成仏久遠成道の説有るをば、枉けて之れを会して、或いは秘密不待時の法華と曰い、或いは因位分証の成道と曰えり。

又た弘法大師は『二教論』に『六度経』所説の乳酪生熟醍醐等の五蔵の説を引き、訖て兪として曰く、

今、斯の経文に依るに、仏、五味を以て五蔵に配当して、総持を醍醐と称し、四味を四蔵に譬えり。震旦の人師等、醍醐を争盗して各自宗に名く。若し斯の経を鑒ときは、則ち掩耳の智、剖割を待たず已上と。

又た道範闍梨、『秘密念仏鈔』に云く、[68]

問う、『観経』所説の九品の階級に就て、其の下品下生の人、

(67) 湛然『止観輔行伝弘決』(正蔵四六・三四五上)。

(68) 道範『秘密念仏鈔』(続浄一五・一〇一上)。

五逆等の重罪を積むと雖も、臨終の十念に依て往生することを得といえり。常途の念仏の力、逆罪を滅するや。答う、『双巻』の「唯除五逆」、『観経』の「五逆得生」、両説水火にして異解多端なり。具に述す可からず。但し、今の所解は秘密念仏に非ずんば、全く逆罪を消す可からず。『六度経』に過去現在の諸仏の法蔵を摂して五蔵と為るに、唯だ第五の総持の蔵のみ独り能く五逆の重罪を滅して前の四蔵には非ずといえり。此の亀鏡に依るに、『観経』の十念は即ち秘密の醍醐を説く。「為説妙法」とは、即ち此の秘密の妙法也云云と。抑も天台円宗の意は専ら『法華』・『涅槃』の明文に依りて一乗と仏性とを以て醇浄の醍醐に喩えたり。然りと雖も真言宗の意として陀羅尼蔵を以て醍醐に名づくる義篇に約して他宗の所立を非ずして以て「争盗醍醐各名自宗」[69]と判ぜり。是れ則ち自宗の光華を以て他経の秀句と為さざる判教の意なり。此の例、多端なり。毛挙に遑あらず。智人自ら知れ。皆に密人服膺して去りぬ。夫れ抑も和漢両朝の群英等、一大蔵経の意を看取せずして、他人迴

(69) 空海『弁顕密二教論』（正蔵七七・三七九上）。

願の善根を以て偏えに之れを諍いて、或いは唯だ薫発道心の助縁と成ると曰い、或いは直ちに出離生死の正業と成ると云えり。若し堅執して融せざらんは、智水、浅ならずと為さず。学山、卑ならずと為さず。若し又た、一往は自業自得の果、再往は他作自受すと云わば、其の所見、其の所聞、倶に以て神妙に匪ずと為さず。

今小師、迴施法界の義相を詳勘せんが為に一代釈典の衆文を披閲するに、其の義門に二途有り。所謂る若し所迴向の人の断迷開悟の義篇に約して、以て能迴向の人の善根の功用を論ぜば、只だ是れ薫発道心の助縁と成りて、或いは見諦修道に修入し、或いは中道法性を証得せん。証悟は心に在りて他に在らざる所以なり。例せば、『輔行』の第一には「在因必籍師保果満称為独悟[70]」と云い、妙楽の第一には「稟承南岳証不由他[71]」と云い、又た『分別功徳論』の文に「所悟在心不拘形服[72]」と宣べたるが如し。

又た『大乗止観』の下に云く、[73]

問て曰く、真心に差別の性有るが故に、仏及び衆生と各異にして不同なり。真心の体、無二なるが故に。一切凡聖、唯

(70) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・一四三下）。
(71) 湛然『法華文句記』（正蔵三四・一五一中）。
(72) 『分別功徳論』（正蔵二五・四七下）。
(73) 慧思『大乗止観法門』（正蔵四六・六五九下）。

だ一法身ならば、亦た応に別に別性有るが故に他は修して、我れは修せず。体是れ一なるが故に他の修するに我れ道を得べきや。

答て曰く、別の義有るが故に他の修は我修に非ず。体是れ一なるが故に修・不修平等なり。然りと雖も、若し此の体同の義を解しぬれば、他の所修の徳、亦た己を益するの能有るべし。是の故に『経』に言く、「菩薩、若し諸仏の所有の功徳、即ち是れ己が功徳なりと知るは、是れを奇特の法と為す」と。又復た『経』に言く「一切の菩薩と同一善根の蔵なり」と。是の故に行者、当に諸仏、菩薩、二乗、聖人、凡夫、天人等の所作の功徳は皆な是れ己が功徳なりと知るべし。是の故に応当に随喜すべし。

問て曰く、若し爾らば、一切の凡夫、皆な応に自然に得道すべきや。

答て曰く、若し此の真心、唯だ同義に有る者は、修行を須いずして他に籍りて道を得べし。又亦た即ち自他身相の別無

かるべし。真如、既に復た異性の義有るが故に。自他の殊有ることを得る者は、寧ろ一向に他にりて道をめることを須いんや。但だ自ら功徳を修して、復た他の所修、即ち是れ己が徳なりと知るが故に、いに相い助成せば、乃ち能く殊勝にして速疾に修道を得べし。何ぞ全く他に倚ることを得んや。又復た須く若し但だ自を修して、他の所作、即ち是れ己が有なりと知らざる者は、復た他の益をも得ざることを知るべし。即ち窮子の父、是れ己が父、財は是れ己が財なりと知らざるが故に。二十余年、更に貧窮の苦を受けて草庵に止宿するが如き、則ち其の義なり。是の故に因に籍り、縁に託して、速かに成弁することを得ん。若し但だ独り求めて、他を仮らずんば、止だ但だ除糞の価を得べし已上。

文の意、沖邈（ちゅうばく）たり。知らんと欲せば来問せよ。密教の所談も亦復た是の如し。

且らく『毘盧遮那経疏』第一に云く、(74)

今、一切智智と謂うは、即ち是れ智の中の智なり。但だし一

(74) 一行『大毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・五八五上）。

切種を以て遍く一切の法を知るのみに非ず。亦た是の法は究竟実際常不壊、相は不増不減にして猶し金剛の如しと知る。是の如きの自証の境は説者も無言なり。観者も無見なり。手中の菴摩勒果の他人に転授すべきには同じからず。若し言語を以て人に授くべくは、釈迦菩薩、定光の授決を蒙りしの時、即ち応に成仏すべし。何が故ぞ具さに方便を修し、要ず無師自覚を待ちて、方に仏と名づけんや。又た目に世人を覩るに刀杖の為に傷らる、復た其の受苦を信じて疑惑すべき無しと雖も、然も種種に説かしめて終に証知せず、若し自身に触受するとき乃ち明了なることを得るが如きのみ已上。

又た云く、(75)

初めに識心と云うは是れ心自覚の智なり。次に又た心と言うは即ち是れ心の実相なり。意（こころ）、境智倶に妙にして無二無別なることを明かすが故に、重ねて之れを言う。自然智とは是れ即ち如来智なり。唯だ是れ心自ら心を証す。他に従いて悟らず。言うこころは仏は既に識心の人中に於て最も第一と為す

(75) 一行『大毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・五九一中）。

上已。

又た云く、(76)

即ち諸仏、将に開権顕実にして『法華経』を説かんと欲すと知る。当に知るべし。金剛手等も亦復た是の如し。普く加持世界を唯だ平等の法門を説きたもうを見て、即ち如来、将に遍一切乗自心成仏の教えを演べんとすと知る上已と。

又た云く、(77)

爾の時、執金剛秘密主、彼の衆会の中に於て、坐して仏に白して言く、世尊、云何が如来応供正遍知、一切智智を得たもう。乃至、是の如きの智慧は、何を以てか因と為す。云何が根と為し、云何が究竟すとは、如来自証の智は、設い神力加持を以ても亦た人に示すべからず。前に「奮迅示現無蓋荘厳蔵」と云うは、皆な外用の迹のみ。智者は其の条末を見て、則ち其の宗本を喩(さと)ること象迹の衆群に超絶して、其の踴践(ようせん)する所、倍(ますます)復た深広なるを観て、其の形を覩ずと雖も当に此の象は身力必ず大なることを知るべきが如し。又た迅雷、雨

(76) 一行『大毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・五八四中）。

(77) 一行『大毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・五八四中～下）。

を澍て能く鳥獣をして震死せしめ、百川奔湧して山を壊せり。陵を襄(のぞ)くこと其の本を測らずと雖も、当に此の龍は威勢必ず大なることを知るべきが如し。今、諸の大衆も亦復た是の如し。如来無尽の身口意、能く一時に普く法界の衆生に応じて妙に根宜に合い仏事を成ずるを覩るを以て、則ち如来の智力は必ず一念に於て、普く群機の本末因縁を鑒て究竟して無礙なることを知らん。照俗の権尚を爾り。其の契実の境界、当に復た云何。若し能く然らずんば、則ち微迹尋ぬべき有らんや。我れ已に尽く覩る。然るに是の法は何に従りて之れを得ることを知らず。故に執金剛手、衆会の疑心に因りて、而も仏に問いたてまつりて言く、云何が如来応供正遍知、此の一切智智を得たまえるやと上已。

又た云く、(78)

此の法は何れの処に従りてか得るや。即ち是れ行者の自心のみ。若し能く実の如く観察して了了に証智する、是れを成菩提と名づく。其の実は他に由りて悟らず。他に従いて得ず。

(78) 一行『大毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・五八七中）。

問て曰く、即心是道ならば何が故ぞ、衆生、生死に輪廻して成仏を得ざるや。

答て曰く、実の如く知らざるを以ての故に。所謂る愚童凡夫、若し是の法を聞けば少しく能く信ずること有り。識性の二乗は自ら観察すと雖も、未だ実の如く知らず。若し実の如く自ら知るは、即ち是れ初発心の時に便ち正覚を成ず。至乃爾の時に行者、正しく心の実相を知るが故に。一切の法を見るに悉く皆な甚深微妙にして無量無数不可思議なり。不動不倚不著にして都べて所得無しと已上。

夫れ円密二宗の意、行人の断惑証理は、専ら自心に在りて更に他に依らずと談ずること、斯の如し。加之のみならず華厳の法界唯心、達磨の以心伝心、三論の八不中道、法相の万法唯識、乃至、地摂二宗、小乗の二十部、皆な悟を以て心法に約して、以て之れを論ぜざるは莫し。啻だ内教に覚悟は心に在りと言うのみに匪ず。外談、亦た爾り。

且らく『荘子』に云く、(79)

孔子、行年五十有一にして而も道を聞かず。乃ち南のかくに之て老聃に見ゆ。老聃の曰く、子来たるか。吾れ聞く。子は北方の賢者なりと。子も亦た道を得るか。孔子の曰く、未だ得ず。老子の曰く、悪くんが之れを求めんや。曰く、吾れ之れを度数に求めること五年にして未だ得ず。老子の曰く、子又た悪んが之れを求めんや。曰く、吾れ之れを陰陽に求むること、十有二年にして未だ得ず。老子の曰く、然り。道をして献すべからしめば、則ち人、之れを其の君に献せずということ莫けん。道をして進むべからしめば、則ち人、之れを其の親に進めずということ莫けん。道をして以て人に告ぐべからしめば、則ち人、其の兄弟に告げずということ莫けん。道をして以て人に与うべからしめば、則ち人、其の子孫に与えずということ莫けん上已。

林希逸、註して曰く、(80)

度数は礼楽なり。陰陽は万物の理なり。五年、十二年は初めより義理無し。但だ精粗に之れを求むること、久しくして未

(79)『荘子』「天運篇」。

(80) 出所不明。林希逸『荘子鬳斎口義』巻五か。

だ得ざることを曰う。爾のみ、道、而も献すべしという自り以下の四句、発し得て極めて妙なり。即ち是れ道の伝うべからざること、乃ち此の如くして這般の言語を発出す、と已上。

内道外教、倶に悟を以て心に約して、義を明むること梗概斯こに在り。然れば則ち悟証門に約して、以て能廻の善根の勝徳を論ぜば、唯だ薫発の助縁と成りて、全く解脱の正因には非ざることを。

次に穢土を離れて浄土に詣し、悪趣を脱して善趣に生ずるの義篇に約して、以て能廻向の功徳の用を明かさば、所受機根の差別に由りて助縁と正因との不同有るべし。未だ断惑証理せずと雖も、浄土に生ずる所以なり。

先ず助縁と言うは、『心地観経』の其の男女追勝の福を以て、父母を開悟して意を発さしむ。口に南無三世仏と称して、或いは十方浄土の中に生ずという文を観つべし。

次に正因と言うは、光明儀軌の父母の霊をして極楽浄土に生ぜしめんと欲せば、西方に向いて誦すること千遍せば、定んで極楽

浄土に生ずという説を証とすべし。斯の如き詳判を、常に心中にせば、或る時は迴向正因の文を見ては、即ち浄土往生の義相を説くと知れり。或る時は迴向助縁の説を聞きては、亦た断迷開悟の相貌を明すと覚ゆらん。二途分別すれば、衆文皆融す。学者迷を致すこと莫れ。

頃年(きょうねん)の比、密行の人、来たりて訇(おどろ)きて曰く「他作自受の深奥は三密学者の能く知る所なり。自業自得の法門は顕宗行人の建立する所なり」。

時に小師問いて曰く、「浄土真宗の学徒、盛んに之れを談ず。孰んぞ密人特り之れを知ると云わんや。抑(そもそも)自作他受と言うは、助縁を言うか、直因を言うか、如何ん」と。

時に彼の人、大いに両途の義門に迷惑(まど)えり。故に面てにの気のみ有りて、言ばに一陳の答え無し。夫れ成仏には助縁為り、往生直因為りと謂う。二途の義相は是れ最も冥邈にして簡別し難し。喩えば金鍮知れ叵く、竜虵弁え難きが如くに相い似たり。若し人有りて二義の深邃(しんすい)を知らんと欲せば、指を染むること再びにし、

三にして宜しく義味を試むべし。設し読み得てし透徹せば、自ら無窮の滋味有らんか。若し小僧が胸中如何んということを看ずして、太早(はやたや)に之れを解し、疎忽に之れを領せば、定んで反って誹訕を生ぜん。若し爾らば老愚が結構の趣を知らざるのみに匪ず。亦た阿鼻の苦種を殖えんをや。慎しむべし慎しむべし。

問うて曰く、自作他受の明拠、正しく出でて何れの経論に在りや。

答えて曰く、涅槃経第十九に云く、(81)

是の仏世尊、金剛の智有りて能く衆生を破したもう。一切の悪業を若し能わずと言わば是の処り有ること無けん。今者此を去ること十二由旬にして、拘尸那城の娑羅双樹の間に在りて、無量阿僧祇等の諸菩薩僧の為に種種の法を演べたもう。若しくは有、若しくは無、若しくは有為、若しくは無為、若しくは有漏、若しくは無漏、若しくは煩悩果、若しくは善法果若しくは楽、若しくは非楽若しくは自作自受、若しくは自作他受、若しくは無作無受なり。大王若し当に仏所に於て無

(81)『涅槃経』一九（正蔵一二・四七八上）。

作無受を聞かば、所有の重罪、即ち当に消滅すべしと。

経文明鑑なり。下語するに能わず。又た宗師詳勘して曰く、[82]

自作の善根と他人の福と一切合集して皆迴向し昼夜精勤して

敢えて退かず。専ら心決定して弥陀を見たてまつらんと。

自作他修、合集して見仏の言、慧眼を開きて之れを看取せば、定んで滋味有らん者のか。

又た南北顕密の行者等、或いは三密の大法を勤修して以て万乗の至尊を護持し、或いは一乗の妙典を講読して以て百寮の安泰を祈願す。然るに護持したまえる毎に、玉体安穏に、祈願する毎に悉地成弁す。若し他作自受の義無しと言わば、応当に之れを会して釈氏の祈念を受けて以て助縁と為して然して後に自勤自修して攘災招福の勝利を得たもうと言うべきか如何ん。

此の義南面の主上に問い奉りて之れを決せよ。斯の旨、北面の臣下に温めて之れを明めよ。若し問いたてまつること有らば、定んで答て不也(いな)とが、設い堅固の執者と雖も、斯の責を聞かば旧年の疑氷、要らず開(とけ)ん者のか。

(82) 善導『法事讃』（正蔵四七・四二六下）。

問いて曰く、此の呵責を聞くに宛かも毒箭の体に入れるが如く、亦た利劔の髄を摧くに似たり。所以に頭を垂れて伏し、手を束ねて降るのみ。但し君臣護持の明文を見て以て累年多載の僻執を撥(のぞ)かん。

答えて曰く、又た本願薬師経に曰く、[83]

爾の時衆中に一るの菩薩摩訶薩有り。名づけて救脱と曰う。即ち座従り起きて偏に一肩を袒ぎて、右膝を地に著けて曲躬合掌して而も仏に白して言さく、大徳世尊、像法転の時に諸の衆生有りて種種の患の為に困厄せられて長病羸瘦して飲食すること能わず。喉脣乾燥して諸方の暗く死相の現前するを見る。父母親属明友知識、啼泣して囲遶す。然るに彼の自身臥せて本処に在りながら琰魔の使の其の神識を引きて琰魔法王の前に至るを見る。然るに諸の有情に俱生神有りて、其の所作に随いて若しは罪、若しは福、皆な具さに之れを書きし。尽く持して琰魔法王に授与す。爾の時に彼の王、其の人を推問し所作を算計して其の罪福に随いて之れを処断す。時に彼

(83) 達摩笈多訳『薬師如来本願経』（大正一四・四〇三下）。

の病人の親属知識、若し能く彼れが為に世尊薬師瑠璃光如来に帰依したてまつり、諸の衆僧を請して此の経を転読し、七層の灯を燃し、五色の続命神幡をて、或いは是の処に有りて彼の識、還(むくい)を得。夢中に在るが如くして、明了に自ら見る。或いは七日或いは二十一日、或いは三十五、或いは四十九日を経て彼の識還る時、夢従り覚むるが如くして、皆な自ら善不善の所得の果報を憶知す。自ら業の果報を証見するに由るが故に乃至命難、亦た諸悪の業を造作せず。是の故に浄信の善男子善女人等、皆な応に薬師瑠璃光如来の名号を受持して力の能ゆる所に随いて恭敬し供養したてまつる。

夫れ自作他受の義、文に載せて分明なり。学者自ら見よ。此の例一つに非ざれば、挙尽すること能わず。若し六親は修福を受けて去識還来すること有らば、豈に十方の他作に由て生死を解脱すること無からんや。智人指を於是(ここ)に染めよ。智人指於是に染めよ。

問いて曰く、文理掲焉(けちえん)なれば、信伏渇仰に竟んぬ。但し過現未三世の善根を皆な法界に迴施すべきや。

答えて曰く、菩提樹下の春の朝には、三世廻向の華の薫(かぐわ)い是れしく、終南山頂の秋の夕には過現廻願の月の光り惟れ明らかなり。夫れ如来は容有に約して未善を以て預しめ之れを施し、大師は已修に就いて過現を以て正しく之れを与う。諸経の釈、互いに挙ぐ。学者局分すること莫れ。夫の自業自得果の一説は偏小権大の所談なり。自作他受報の直示は垂終決了の誠文なり。智人心に留めて宜しく漆桶を破すべし。

問うて曰く、善悪の二法は、喩えば鳥の双翼の如く、又た車の両輪に似たり。若し法に自作他受の義有りと言わば、悪業も亦た爾なりや。

答えて曰く、此の難不類なり。夫れ善悪の二法は一心法界の理内従り出生すと雖も、善に清昇の徳有り。悪に沈墜の能有り。相濫すること莫れ。

凡そ一大蔵経を観るに、多く善根廻願の義を教ゆと雖も、未だ悪業廻施の相をば明さず。是れ則ち善には自作他受の徳有り、悪に他作自受の能無き所以んなり。抑(そもそも)此の難勢の意を案ずるに、

薫発助縁の義門を建立して他善正因の直路を閉塞せんが為めならん。若し爾らば亦た小子仁者難ずべし。謂く若し他善薫発助縁の旨を成立せば、亦た当に他悪薫発助縁の義を存すべきか。如何ん。

若し答えて、悪業を以て他人に迴せば、他人必ず悪業を造るべしと言わば、大いに仏法の大道理に背けり。孰れの智人か此の談を許諾し、奚れの学者が此の義を点頭せんや。只だ是れ外道の僻執なり。抑(そもそも)亦た魔伴の邪説なり。仁者慎しんで不忍の言を出だすこと莫かれ。

問うて曰く、無始より以往(このかた)三世十方の諸仏如来、因従り果に至るまで、所修の功徳を以て皆な悉く法界に廻施して更に已分の為にせずと。若し爾らば、或いは薫発の助縁にまれ、或いは往生の直因にまれ、一切衆生等、奚ぞ今に生死に流転して菩提を得ざるや。

答えて曰く、薩埵能迴の志しは、是れ平等なりと雖も、法界有性の中に繁属の厚薄有り。故に受善に早晩有り。受善に遅疾有るが故に解脱に亦た前後有り。得脱に遠近有れども迴向の功力、終

に唐捐ならず。実に憑有る者をや。有る処に曰く、(84)

我今の所行は法界の所修なり。我身即ち是れ法界の体なるが故に恩の軽重に依り、縁の浅深に依って、所受の利益に前後有りと雖も、終に此の迴向一として受けずということ無しと。

智人之れを看て疑網を除け。

抑(そもそも)若し学仏の人有りて、従上の所立を看取し聴得すること能ずんば、孰れか之れを師曠(しこう)の聡と謂んや。誰れか之れをが明と称せんや。若し此の一篇を読得し説得すること有らば、是れ則ち身子か才智か慶喜か多聞か。夫れ迴施法界の功力は、生死嶮難の堅牢の大車なり。利他迴願の勝用は流浪巨海の浮嚢なり。然れば則ち二道の行者等は、専ら自他抜済の修善を綷することを。爰に弟子多載念仏摩尼の宝珠を捧げて以て双親の菩提に資す。定んで七覚の聖財を雨ふらすらん。名号栴檀の与楽を取りて以て四恩の得脱に迴す。必ず五分の法身を研(みが)くらん。夫れ受け難き人身を受けたる紅桃の三千年に、一たび開けるよりも乏し。値い叵き名号に

(84) 出所不明。

値えること、黄河の一千載に始めて澄めるよりも希(まれ)なり。嗚呼、駟(しば)馬隙を過ぐ。風姿を孰れの家にか繁がん。二鼠草を喫す。露命を何の処にか逗めん。南無阿弥陀仏。

浄土十勝箋節論巻中　　乾上終